

メキシコにおけるドイツのスパイ活動

巡洋艦出雲の将校がビヤに持ちかけたと同じように、ドイツのスパイは1915年以降ビヤを利用して米墨間の全面戦争を挑発しようと暗躍していた。ビヤのコロンバス襲撃に関して、ドイツの影響があったかどうか、確固とした証拠はない。アメリカが懲罰軍をチワワに送り込んだことで、ドイツは狂喜した。ビヤのコロンバス襲撃とアメリカの懲罰軍は世界史にどのような影響を及ぼしたのであろうか。勿論、進行中のメキシコ革命に重大な影響を与えた事は言うまでもない。アメリカが1915年、英国、フランス、ロシアに武器、弾薬、その他の物資を供給するようになって以来、アメリカ船をU-ボートの標的にする、所謂「無制限U-ボート戦争」の是非が、ドイツ政府内部で論議的的となっていた。それにより英仏軍を屈服させることが出来る、と主張したのは軍部であった。一方、政府内の文官は、その結果アメリカ軍が参戦すれば、軍事的なバランスが一举に崩れることを畏れた。

メキシコへ侵入したアメリカ遠征軍が目的達成に失敗したことで、ドイツ軍はアメリカ軍が未だ戦闘能力に欠け、参戦しても取るに足らない、と見做すようになった。このことがカイザーを初めとする「無制限U-ボート戦争」の反対派を説き伏せる結果になった。1916年3月、ドイツ軍広報部は、アメリカ軍はビヤ追討作戦において、その無能さを露呈した、と宣伝した。アメリカは軍隊もなく、重砲、輸送手段、航空機を持たず、近代戦争に必要な兵器は何もないと報道した。その一方でドイツは、米墨間の危機に乗じて、カランサガアメリカを反撃し、ウイルソンがメキシコを侵略することに過剰に期待をかけた。その結果、ドイツ政府内で、確実にアメリカの参戦を促すことになる「無制限U-ボート戦争」派が次第に勢力を増していった。¹⁷

懲罰軍が送り込まれたにもかかわらず一向に全面戦争になる気配が見られないため、ドイツは新たな手段に出た。越境襲撃による戦争誘発に失敗したため、今度はメキシコ油田の攻撃をビヤに持ちかけた。既にビヤと面識のあったトレオン駐在ドイツ領事は、1916年12月、ビヤのトレオン戦勝利のパーティーを開いて、ビヤにタンピコ攻撃計画を持ちかけた。トレオンからタンピコの間はカランサ軍の守備が手薄であり、タンピコでは武器弾薬を搭載したドイツ船が待っていると聞いた。ビヤは最初その気になったが思いなおしてチワワへ向かった。ビヤはタンピコ攻撃を自殺行為と思ったからに違いない。ビヤにはそれだけの力がないことを理解したドイツは、今度はカランサに矛先を変えた。

ドイツはメキシコで少なくとも二十三の新聞に、しばしばフルページの広告を載せ、ドイツ支持の報酬として商業上の特典や領土を与えると宣伝した。メキシコ国内では多くのドイツ・スパイが暗躍し、1916年の暮れ、カランサは潜水艦基地建設をいったん承認したが、基地を作るまでに至らなかった。こうして、アメリカの参戦を決断させる直接の原因となった事件が発生した。

1917年1月、ドイツの外相アーサー・ツィンメルマンはカランサ宛に電報を送り、テキサス、アリゾナ、ニューメキシコの返還を約束するかわりに、アメリカがドイツの敵として参戦したら、アメリカを攻撃しないか、と持ちかけた。この中でツィンメルマンはメキシコが日本と正式に軍事同盟を結べば、資金援助をすることを約束した。¹⁸

これが後世に名を残す「ツィンメルマン・テレグラム」である。この電報はイギリスの諜報機関によって傍受され、アメリカの新聞が公表した。これにより、それまで不干渉主義を通してきたアメリカの世論が反独に一変した。¹⁹

カランサは四月、拒否の回答を送ったが、ツィンメルマンはアメリカがメキシコと日本に屈辱を与えているからであると弁明し、その四ヵ月後再び催促した。噂ではブリティッシュ・ホンジュラスが報酬として上げられていたという。カランサが断ったのはメキシコがとてもちこたえられないと思ったし、日本がメキシコやドイツと同盟を結ぶとは考えられなかった。日本はこのことを新聞公表されるまで知らなかった。²⁰

17. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P612
18. Douglas W. Richmond, "Venustiano Carranza's National Struggle, 1893-1920", University of Nebraska Press, 1983, P204
19. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P612
20. Douglas W. Richmond, "Venustiano Carranza's National Struggle, 1893-1920", University of Nebraska Press, 1983, P209